燃え上がる復讐の瞳

丘澄絵梨奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
燃え上がる復讐の瞳

【Ｎコード】
Ｎ６１６０Ｃ

【作者名】
丘澄絵梨奈

【あらすじ】
マンマルバの卑劣な罠にはまり、瀕死の重傷を負う一甲。一甲の命を救うため、一鍬はマンマルバと対決する！

第1話

『次の満月の夜、おまえは死ぬ』
　自分が死ぬ夢を見て、飛び起きた一甲の脳裏にマンマルバの言葉がよぎる。

「もう、俺に残された時間はない…」
　一甲は覚悟を決めると、隣で眠っていた一鍬を起こした。
「どうしたんだ？　兄者　こんな時間に…」
「いいから来い」
　一甲は一鍬を連れて、外へ出た。
「いいか一鍬　これから俺がやる技をよく覚えておけ。　おまえはいつかこれを使うときがくる」
「そんなにすごい技だったら、何も俺じゃなくて、兄者が使えばよいではないか！！」
「俺にはもう時間がないんだ！！　鷹介に託そうとしたのだが、拒否されてしまった。　もうおまえしかいないんだ」
　そう兄に言われて、一鍬はその技を継承することを承知した。
　技の訓練は、朝日が昇るまで続いた。

　その日、三匹の狼が現れたという知らせを受けて、鷹介たちは指示された場所へ向かった。
　ところが、戦闘中に一甲が苦しみだし、倒れてしまう。
「兄者！！　しっかり！」
「…大丈夫だ……。俺にはまだやらなければならないことがある」
　そういって、支えている一鍬の手をそっとはらうと、一甲はマンマルバを見据えた。
「来い、マンマルバ！！」

一甲はそう挑発し、マンマルバと共に姿を消した。
一鍬は慌てて後を追った。
「一鍬！！」
鷹介も七海たちに後を任せ、一鍬を追った。

「一鍬！！　待てって！！　一甲に何かあったんだろう？　そうなんだろう？」
「うるさい！　おまえには関係ないだろう！！」
「バカ！！　そんなこと言ってる場合かよ！！　一鍬　頼むよ　何があったのか話してくれよ。　俺たち、仲間だろ？」
心配そうに見つめてくる鷹介に、一鍬はこれ以上隠しとおすことはできなかった。
（兄者…すまない。　もう、これ以上は無理だ…）
一鍬は心の中で、兄に詫びた。

一方、迅雷の里では、一甲とマンマルバとの戦いが始まろうとしていた。

「なんだって！？　本当なのかよ、それ！！　どうして今まで黙ってたんだ！！」
「すまない。　兄者に誰にも言うなといわれていた…　俺だって、ずっと相談したいと思ってたんだ！！　それを、今日まで…」
「ごめん…　一番辛かったのは一鍬だもんな。一甲の苦しむ姿をずっとそばで見つづけて」
「兄者に死んでほしくなんかない！！　ずっと一緒に戦っていきたい。　でも…もう、手遅れだ。　兄者の体内のサソリが孵化するのは今夜だ」
「うそだろ…？　一鍬」
「本当だ。今夜は満月だろう？」

「ああ」
「マンマルバの指定している命の期限は、今夜だ」
「そんな…」
「俺は兄者のところへ行く。　だからおまえは、狼たちをなんとか食い止めてくれ。　七海たちだけじゃ無理だ」
「わかった。だけど一鍬、もし何かあったら　俺たちを呼んでくれ」
「わかっている」
一鍬は兄とマンマルバの元へ走っていった。

迅雷の里。
煌く満月の下、一甲はマンマルバと戦っていた。
だが、再び胸の激痛に襲われ、倒れてしまう。
「いよいよ孵化のときがきたようだな。　カブトライジャー」
マンマルバは余裕の笑みで、シノビチェンジが解除された一甲を見つめた。
（ここまでか…）
だがそのとき――
「兄者からはなれろ！　マンマルバ！！　超忍法・牙稲妻！！」

第2話

「兄者！！」
その叫びに、一甲は苦しみに耐えながら、ゆっくりと起き上がりかけた。　最後まで一鍬にだけは心配をかけたくなかったのである。
「兄者！！」
一鍬が一甲を抱き起こす。
「一鍬…」
「しゃべらないでくれ。　苦しいのだろう？　あとは俺が…」
「一鍬！　気をつけろ。　マンマルバは手ごわい相手だ」
その言葉に、一鍬はうなずいた。
一甲の身体をそっと岩壁に凭れさせるとマンマルバと対峙した。
「マンマルバ！！　貴様だけは俺がこの手で倒す！！　迅雷、シノビチェンジ！！」
「おまえひとりに、何ができるら。　宇宙忍法・火炎球！！」
一鍬はその技を交わし、攻撃態勢に入る。
「迅雷流剣技・雷牙一撃！！」
「うわあっ！！」
二人が戦う様子を、一甲は眺めていた。
（ずいぶん成長したな。一鍬。　これなら、マンマルバを追い詰めることができる……）
そのとき、一甲の胸にすさまじい激痛が走った。
「ぐっ…！　ぐぁっ！！　ううっ！！」
その苦しそうな声を聞いた一鍬が瞬時に振り返った。
「兄者！？」
「ついに始まったようだな。　孵化が。　ハハハハハ」
そういい残して、マンマルバは姿を消した。
一鍬は変身をといて一甲の元へ駆け寄った。
「兄者！！　しっかりしろ！！」

一鍬が抱き起こすが、一甲は痛みに耐えるのが精一杯の状態だった。
やがて、彼は一鍬の腕の中で意識を失った。
「兄者…　兄者…！　兄者ぁっ！！」
一鍬は兄を抱きしめて泣いた。
（兄者…　俺は…これから、どうしたら…！！）
だが、抱きしめた兄の胸からかすかに心臓の鼓動が聞こえて、ハッとした。
（まだ、兄者は死んでない…！！）
そのわずかな希望を胸に秘めて　一鍬は兄を支えて立ち上がった。
そこへ、鷹介たちがやってきた。
「一鍬！！　一甲は？」
「サソリは孵化してしまったようだ」
「なんだって！？」
「それじゃあ……」
「だが、まだ兄者は死んでいない。　弱々しいが心臓の音が聞こえた。だから…」
そこまで言って、一鍬は涙を落とした。
「とにかく、病院へ一甲を運ぼう！！　さっきおぼろさんから連絡があったんだ。　共成病院へ急ごう！！」
「ああ！！」

第3話

翌日。
街に再び狼たちが現れたという連絡を受けて、鷹介、七海、吼太の3人は現場へ向かった。
ただひとり、一鍬だけは一甲のそばを離れなかった。
すでにサソリの毒は全身に回っていて、予断を許さない状態だと高梨は告げた。
(兄者……)
兄の手を両手で握り締め、泣きそうな表情で寝顔を見ていた。
そのとき、チェンジャーから鷹介たちの悲鳴が聞こえて、一鍬は我に返った。
握っていた兄の手を離し、椅子からゆっくりと立ち上がった。
(行ってくる。　兄者)
一鍬は一甲の病室を出た。
一甲の病室を出て、しばらく歩いていると　高梨と無限斎の会話が聞こえた。
「それでは、助ける方法があるというんですか?」
「ええ。　あのサソリは埋め込んだ本人を倒せば消滅するようです。あと必要なのは解毒剤になりますが。その解毒剤も、本人が所持しているでしょうから」
その会話を聞いた一鍬はすぐに飛び出した。
(待っていてくれ。　兄者…)
一鍬は近くの海辺に、マンマルバを呼び出した。
「マンマルバ!!　出て来い!!　俺はここだ!!」
「自ら現れるとは…　兄の後を追いたくなったか?　クワガライジャー」
一鍬はマンマルバを厳しい表情で睨みつけると、クワガライジャーへと変身した。

（貴様のせいで、兄者がどんな思いをしたか！！）
一鍬は怒りの力を攻撃に変え、マンマルバに向かった。
（つ…強い…！　いったいどういうことら…？）
「雷牙一閃！！」
「ぐっ！」
一鍬は一甲に教えられた技――カブト雷撃破を使った。
タイミングは若干合わなかったが、マンマルバにはかなりの打撃だった。
「貴様…！！　兄貴と同じ運命をたどるがいい！！」
マンマルバの手からサソリが飛ぶ。
しかし一鍬は、円月の型で防御し、サソリはマンマルバの胸に跳ね返った。
「ぐあっ！！」
「どうだ？　サソリの毒の苦しみは？」
「おのれ…！！」
「兄者はずっとその苦しみに耐えていた。マンマルバ！！　兄者が受けた苦しみ、今こそ思い知れ！！」
マンマルバは一鍬に対し、火炎玉をはなったが、威力は失っていた。
「我らの前から失せろ！！」
一鍬はマンマルバにさらに強力な雷撃を浴びせ、葬り去った。
「やったのか…？」
マンマルバの爆発後、地面には透明なビンが残った。
おそらくこれが解毒剤だろうと感じた一鍬は、そのビンを手にとった。
「これで、兄者は助かる…！！」
そのとたん、身体から力が抜けて一鍬はその場に崩れ落ちた。
だが、胸の痛みと戦っている兄のことを考え、必死で立ち上がると、病院へ戻った。

そのころ、鷹介たちは狼を相手に苦戦していた。
「一鍬はまだ病院にいるみたいだな」
「無理もないさ。　たった一人の肉親が危険な目にあっているんだ。心配でたまらないだろうよ」
「でも、あたしたちだけじゃ　もう…」
「ボーイたち、ミーのことを忘れてないかい？」
「シュリケンジャー！！」
「ようし、４人でがんばろう！！」
「おう！！」

共成病院。
「一鍬！！」
「マンマルバを…倒してきた。　これを兄者に早く…」
そのビンを渡そうとして　一鍬は床に倒れこんだ。　身体は限界を超えていた。
「ありがとう。君の努力は無駄にはしないよ。　お兄さんは必ず助けるから」
その言葉に一鍬は安堵の笑みを浮かべた。
「それよりも、君は大丈夫かい？」
高梨は一鍬の額に手を当てた。
「ひどい熱じゃないか！！　疲れが出たんだろう。　君は昨日から一睡もしていないんだから」
高梨は一鍬を抱き上げると、一甲の隣のベッドに彼を寝かせた。
看護婦を呼んで点滴の針を一鍬の腕に刺した。
熱は相当高く、一鍬の呼吸はかなり乱れている。
高梨は一鍬の思いを無駄にはするまいと、すぐに解毒剤を抽出し、点滴で一甲に投与した。
一鍬がマンマルバを倒したことで、一甲の表情からは苦しみの色が消えていた。

「これでもう、心配は要りません。　あとは弟さんの熱が下がればすべて解決です」
「ありがとうございました」

なんとか、狼たちを追い払った鷹介たちは病院へ戻った。
「館長、一甲たちは？」
「もう大丈夫じゃ」
「よかった…」
「ああ」
「で、狼たちはどうなった？」
「なんとか追い払ったんですが、いつまた襲ってくるか…」
「おまえたちはいったん戻って　待機じゃ」
「わかりました」
鷹介たちは、研究所へ戻った。

一甲が目を覚ましたのは、その日の夕方だった。
「…俺は……」
「弟さんががんばってくれたんですよ」
その言葉に一甲は慌てて起き上がった。
隣のベッドには苦しげな表情の一鍬が眠っていた。
（一鍬…まさか、俺を助けるためにサソリの毒を……？）
「疲れが出たようで、熱がありますが　じきに下がるでしょう」
そういって、高梨は部屋を出て行った。
一甲はホッと胸をなでおろすと、隣の一鍬のベッドへ歩み寄った。
汗で額に張りついた前髪をそっと後方へ梳いた。
（一鍬…　すまなかった。　そして、ありがとう）

最終話

夜。
病院内に静寂が訪れた。
今、ここにいるのは高梨と一甲、一鍬の3人だけだった。
一甲は高梨から戦いに備えて休むよう言い渡されていたが、熱が下がらず、　いまだに目覚めない弟のそばに付き添っていた。
一鍬の身体は、ずいぶんと痩せてしまっていた。
高梨は、疲労と心労が原因だと言った。
その要因が自分にあることを、一甲は自覚していた。
（一鍬…俺を、許してくれ…　辛い思いをさせたな）
一甲は備え付けのタオルで、弟の汗を拭き取った。
一鍬は怖い夢を見ているのか、時折　兄の名前を口にした。
そのたびに一甲は、弟の手を力強く握り締めてこう言った。
「大丈夫だ。一鍬　俺はここにいる」
その声が届いているのか、安心したように眠る一鍬の髪をそっとなでる。
そんなことを繰り返すうち、一甲も押し寄せてきた眠気に身をゆだねた。
ベッドへは戻らず、弟の手を握り締めたまま、頭を落とした。

翌朝。
眩しい朝の光が差し込んで、一鍬はその眩しさにゆっくりと目を開けて起き上がった。
（俺はいったい…？）
状況を把握できないでいる一鍬だったが、昨日あった　身体のだるさや辛さがすべてなくなっていることに気づいた。
（どうやら、あのまま倒れて眠ってしまったようだな。　兄者は…）
一鍬は必死に兄の姿を探した。　だが、視線を動かした先に兄の

頭があった。
（兄者…！！　どうして…？）
点滴をしていないほうの手に温もりを感じて自分の手を見ると、兄の手が自分の手を握っていた。
（兄者、よかった。　助かったんだな）
とたんに胸の中に湧き上がる思いを抑えきれなかった。
「……っ」
それは涙となってあらわれた。
こぼれた涙の雫が一甲の手の甲に、ぽつんと落ちた。
それによって、一甲も目を覚ました。
「一鍬…」
「あに……じゃ……」
あふれる涙を見せまいと一鍬は下を向いた。
一甲は椅子から立ち上がると、弟を自分の胸に抱き寄せた。
「すまない。辛い思いをさせたな」
その兄の言葉に、堰を切ったように涙が溢れ出し、一鍬は泣き出した。
一甲は弟のこまかく震える肩を抱き、背を優しくなでた。
「俺はもう、おまえをひとり残して逝ったりはしない。約束する。二度とこんな思いはさせない。　一鍬、俺を許してくれ。　俺がおまえに何もするなと言ったのは、俺と同じ運命をたどってほしくなかったからだ。　おまえにはあんな苦痛を味わせたくはなかった。決しておまえを邪険にしたわけではない。わかってくれ」
一甲は弟の流れた涙を自分の指でぬぐった。
「俺はずっと、おまえのそばにいる」
「兄者…」
一甲のまっすぐな瞳に見つめられて、一鍬は何もいうことができなかった。
兄がこんなにも自分を思ってくれているのがうれしかった。
「身体は大丈夫か？」

「ああ。　もう平気だ。　兄者…　無事でよかった」
「これからも、共に力を合わせて戦おう。　一鍬」
「ああ。　兄者」

ＥＮＤ

最終話（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。
感想等いただけるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6160c/

燃え上がる復讐の瞳

2010年10月8日15時33分発行